ペーパークラフト　～切組灯籠（きりくみどうろう）～

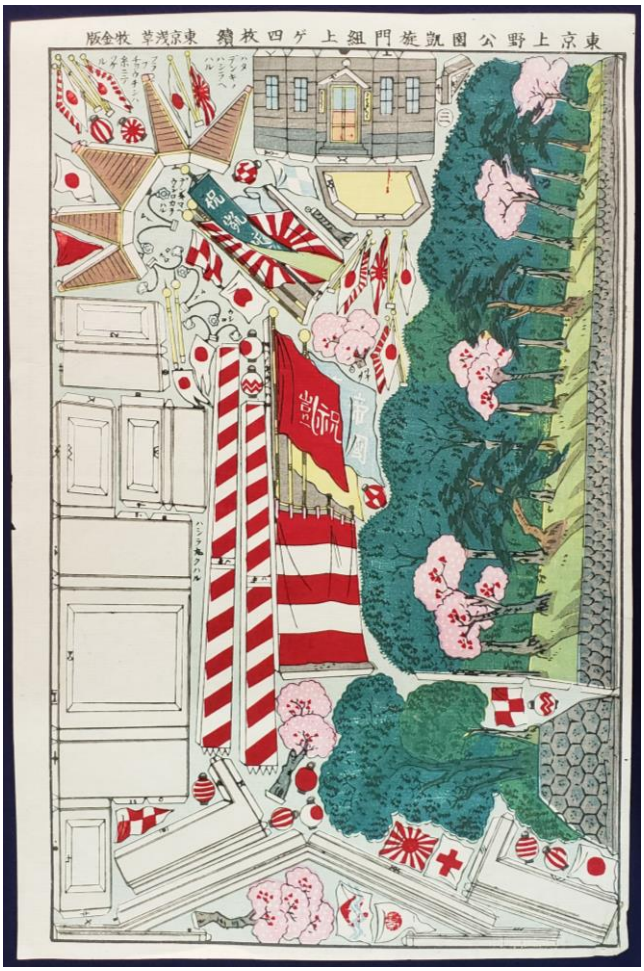
切組灯籠は、錦絵の中に描かれた人物や建物などの部品を切り抜いて芝居の一場面などを組み立てたものです。夕涼みの床机の上などで蝋燭を灯して飾り、その出来栄えを楽しみました。江戸・大坂・京で盛んに行われ、江戸時代から大正時代頃まで作られていました。関西では立版古（たてばんこ）の名で親しまれています。

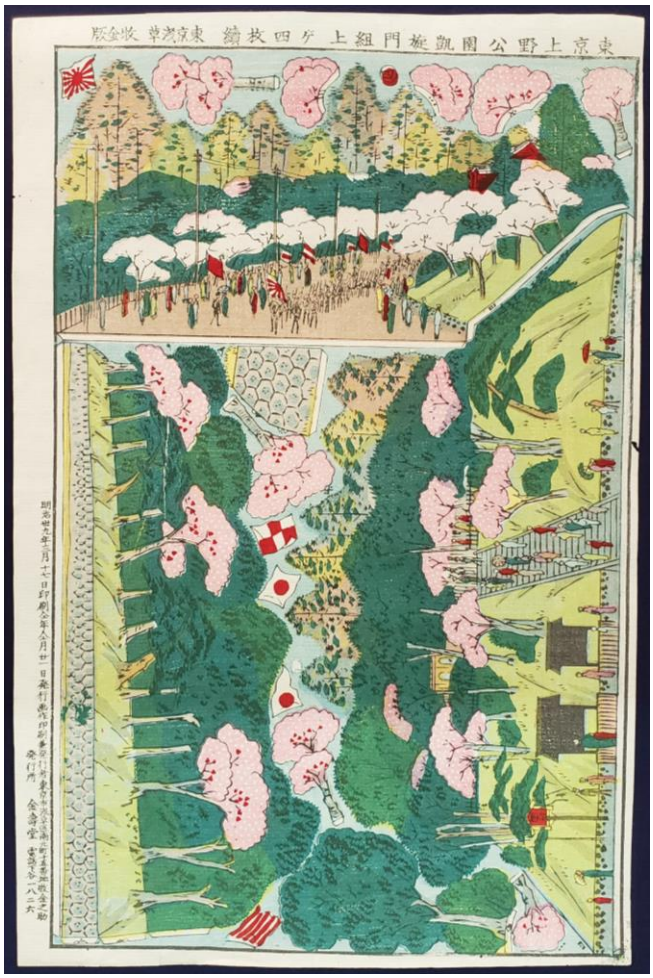
原画は浮世絵師が描きましたが、絵師としての腕前以外にも、限られた紙面の中に各部分を無駄なく配置する技量も必要とされました。

元来組み立てて遊んだ後は捨てられてしまう消耗品であったため、現存する資料の少ない貴重なものです。

切組灯籠「東京上野講演凱旋門」（財）松井文庫所蔵

明治39年（1906）、東京浅草の牧金之助が出版したものです。もともと4枚で1セットでしたが、現存するのは2枚です。日露戦争の戦勝を記念して出版されたものと思われます。当時の風物も切組灯籠の題材として取り上げられました。

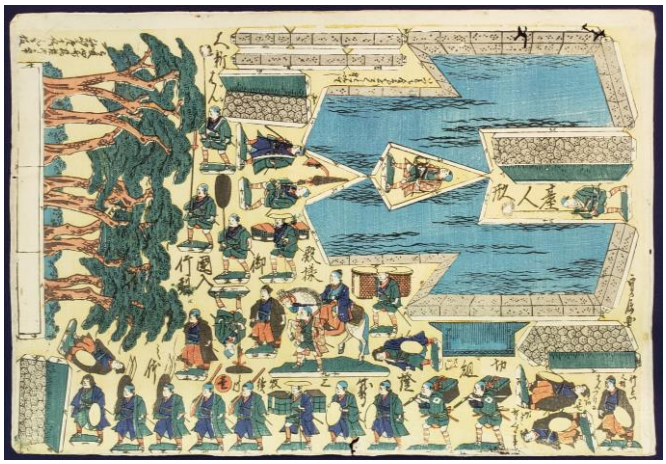


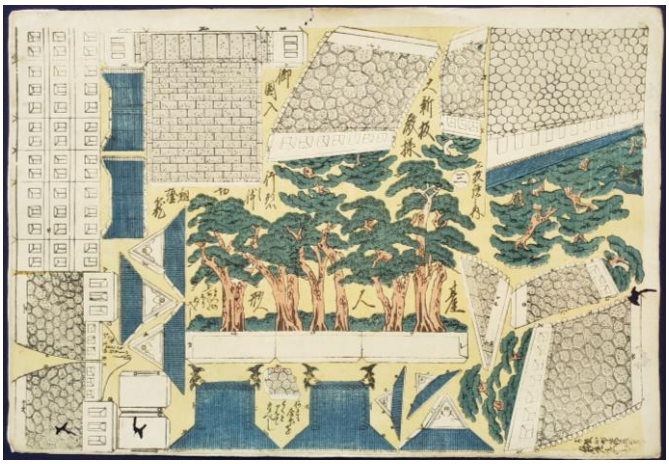


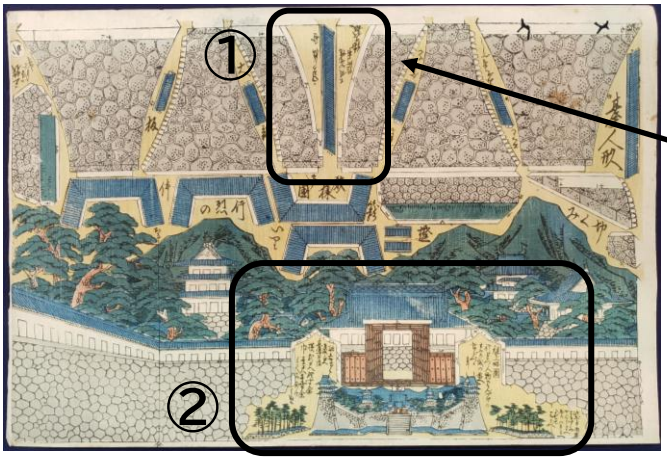
切組灯籠「殿様御国入り」（財）松井文庫所蔵

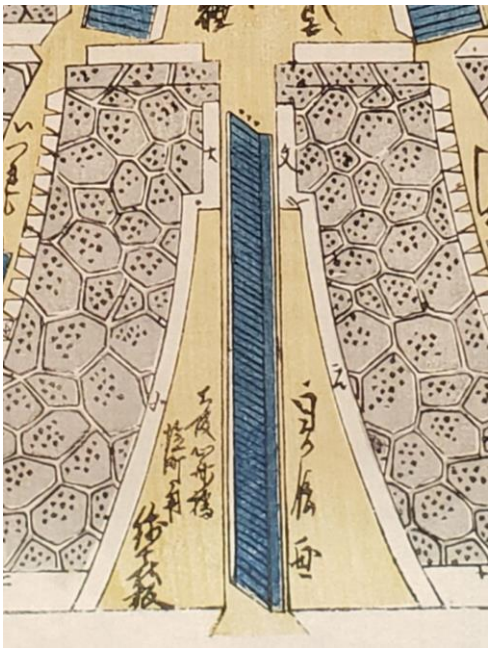
文久元年（1861）に綿屋喜兵衛（大坂心斎橋塩町角）が出版したもので、原画は上方の絵師長谷川貞信によって描かれました。3枚1セットの切組灯籠です。

↓組み上がるとこうなります









①のりしろの合印に注目！
こんなところに出版した年号（文久元）が…
「貞信画」「大坂心斎橋　塩町角　綿喜板」と絵師と版元の名も書かれています。

②完成のイメージ図が描かれています